

戦後奄美政治の対立構図
—保徳戦争前夜の動向を中心に—

寿 洋一郎

Confrontation in post-war Amami politics
—Focusing on trends leading up to the Yasu-Toku Feud—

KOTOBUKI, Yoichiro

Abstract

The aim of this article is to understand why the fierce political struggle in the Amami Islands, the Yasu-Toku Feud, took place by looking at two points: the movement of post-war politics in the islands and the conflict axis between the two sides.

The Yasu-Toku Feud refers to three national elections from 1981 to 1993 contested between Yasuoka Okiharu, the incumbent member of the House of Representatives and defense council in the Lockheed bribery scandal case and Tokuda Torao, director of the Tokushūkai Medical Group, an organisation that was in the limelight for championing reform in Japanese healthcare. At the time, the Amami Island constituency was the only single seat in the House of Representatives, the rest being multiple-seat constituencies.

The stage for the feud, the Amami Islands, with a population then of 150,000 (120,000 today) and 1250km² in size, is a disadvantaged region, having had a difficult past, oppressively taxed by the Satsuma Domain and imposed under American occupation for seven years after the end of WWII and geographically lying in the typhoon alley between Okinawa and the Japanese mainland, with limited agricultural and industrial output as well as poor transportation and social infrastructure.

It was in this region that the Yasu-Toku feud waged, but many newspapers, weeklies, magazines and television stations took up the story. In particular, Tokuda became the focal point for a time and more 30 books were published, some self-authored, about him. All were by journalists and episodic, not centering on the feud with Yasuoka.

As for academic work, there is an article in Soma Masao's book about Japan's general election in 1983. Soma conducted many local interviews and considered from a political perspective. However the 1983 election was only the first of the three election battles undertaken by the pair.

The first section of this paper, the lead up to the feud, provides an overview of the political trends from the election immediately after the return to Japanese sovereignty of the Amami Islands, the formation and collapse of the confrontation and the period when Yasuoka Okiharu's strength was built.

The second section looks at the growth of a long-awaited rivalry, following the different maneuvers for candidate support focused on the so-called losing side that came together to depose Yasuoka.

The final section, the emergence of Tokuda, describes how Tokuda Torao, who was advancing healthcare reform nationally, came to the candidacy in his hometown Amami Islands constituency with the resolution to destroy healthcare business.

Keywords : Yasu-Toku Feud, Amami Islands, healthcare and construction

要旨

本稿の目的は、奄美群島において繰り広げられた、熾烈な政治闘争「保徳戦争」がなぜ起こったかについて、①戦後奄美政治の動きから捉えることはできないのか、②二人の間の対立軸は何であったのか、この2点の顕彰を通じて明らかにすることである。

保徳戦争とは、1981（昭和56）年から1993（平成5）年までの間、衆議院議員選挙奄美群島区において、当時現職でありかつ田中ロッキード事件の弁護人として活躍していた現職衆議院議員保岡興治と、日本の医療改革の旗手として脚光を浴びていた特定医療法人徳洲会理事長徳田虎雄との間で争われた3回に渡る国政選挙をさす。当時は衆議院議員選挙が中選挙区制であった日本の選挙制度の中で、奄美群島区だけは唯一の小選挙区であった。

保徳戦争の舞台となった奄美群島は、その当時人口15万人（現在12万人）、面積1250km²の規模で、過去には島津藩の苛斂誅求を受け、戦後の約7年間は米軍の支配下にあつて苦難の道を歩み、地理的には日本本土と沖縄との谷間に位置し、台風常襲地帯なるが故に、市場出荷できる農作物も限定されており、概して産業も乏しく、交通事情をはじめ諸々の社会基盤が劣悪など様々なハンディキャップを背負った地域である。

このような地域で保徳戦争は繰り広げられたが、この争いを取り上げた新聞、週刊誌、雑誌、テレビは数多い。特に徳田は一時期“時の人”でもあり、本人自ら著したものを含めその出版物は30冊以上発行されている。いずれもジャーナリストによるものであり、エピソード中心で、保徳戦争をメインテーマにはしていない。

学術論文としては、柚正夫編著『日本の総選挙1983年』に収められている論稿がある。現地取材も綿密に行い、政治学的見地から考察を行っている。だが、この本のタイトルにあるように3回の戦いのうち、1回目（1983年実施総選挙）だけを扱い、全体はカバーしていない。

本稿は3章立てで、第1章で、「保徳戦争前夜」として、奄美が日本に復帰した直後の選挙から、対立の構図が形成され、その後それが崩れ保岡興治一強時代が築かれた頃までの動向を概観する。

第2章では、「対抗馬待望論の芽生え」と題して、いわゆる負け組を中心に「打倒保岡」勢力を結集して、候補者擁立に向けてのさまざまな模索策動を追う。

第3章の「徳田の登場」では、全国的に医療改革を進め軌道に乗せつつあった徳田虎雄が、医療事業を棒に振る覚悟を持ってどのような経緯でふるさと奄美群島区での出馬に至ったかを追う。

キーワード：保徳戦争、奄美群島、医療と土建

はじめに

本稿の目的は、奄美群島の暗い歴史の一駒であり、熾烈な政治闘争「保徳戦争」がなぜ起こったかについて、①戦後奄美政治の系譜、②保岡・徳田両者間の対立軸、この二点の検証を通じて明らかにすることである。併せて、時の経過とともにやがて忘れ去られようとしているこの一大政治抗争について、地元及び内側からの視点を加味して検証を試みる。

保徳戦争とは、1981（昭和56）年から1993（平成5）年までの間、衆議院議員選挙奄美群島区において、当時現職でありかつ田中ロッキード事件の弁護人として活躍していた衆議院議員保岡興治と、日本の医療改革の旗手として脚光を浴びていた特定医療法人徳洲会理事長徳田虎雄との間で争われた3回に渡る国政選挙をさす。当時は衆議院議員選挙が中選挙区制であった日本の選挙制度の中で、奄美群島区だけは唯一の小選挙区であった。即ち一選挙区定数1であった。復帰直後¹から再選挙や選挙賭博などで話題の多い選挙区でもあったが、この保徳戦

1 1945（昭和20）年9月2日、奄美群島は米軍によって本土から分割され米国民政府の統治下に置かれたが、1953年12月25日に返還された。

争において出馬した両候補とも、全国的に名前が売れていて、存在感もある人物どうしで、島サイドの表現を用いれば「超大物対決」「横綱決戦」などと表された。それ故従前に輪をかけて過熱した争いを大々的に演じたために、本土のマスコミや中央政界からも一段と注目された。そして、現実の戦争になぞらえて後に「保徳戦争」と称されるようになった。

保徳戦争の舞台となった奄美群島は、その当時人口15万人（現在12万人）、1市10町3村（現在は1市9町2村）、面積1250km²の規模で、歴史を遡れば藩政時代は島津藩の苛斂誅求を受け、戦後の約7年間は米軍の支配下（信託統治）にあり、郡民個々は学業を終えるといったんは関西関東など都会に出るが、言葉習俗等の違いから就職結婚などで相当数の者が偏見にさらされ、島差別を受け、受難の時代をくぐってきている。地理的には日本本土と沖縄との谷間に位置し、亜熱帯気候、かつ台風常襲地帯なるが故に、市場出荷できる農作物も限定されており、一頃脚光を浴びていた伝統産業「大島紬」も世の中の着物離れ等の影響を受けて低迷の一途を辿り、概して産業基盤も脆弱な上、交通事情をはじめ諸々の社会基盤が劣悪と言ったハンディキャップを背負った地域である。

このような地域で保徳戦争は繰り広げられたが、この争いを取り上げた新聞、週刊誌、雑誌、テレビは数多い。特に徳田は一時期“時の人”でもあり、当人自ら著したものを含めその出版物は30冊以上に及び、もう一方の当事者保岡よりその数をはるかに多い。大半は徳田の医療改革・医療戦争とからめた評論もの、ルポルタージュ、徳田称讃又はその逆の徳田批判の読み物である。いずれも保徳戦争そのものを主題にして取りあげた内容にはなっていない。徳田を主体に扱った文献の中で保徳戦争に比較的多くのスペースを割いているのは、『徳洲会徳田虎雄への疑問』であり、比較的新しく出されたものとしては『トラオ 徳田虎雄 不随の病院王』、『神になりたかった男徳田虎雄』などが挙げられる。これらはいずれもジャーナリストによるものであり、エピソード中心で、保徳戦争をメインテーマにはしていない。

一方、保岡には自らが執筆した数冊の著作がある。そのうちの『思春期を迎えた日本の政治—金権選挙区・奄美群島に見る中選挙区制度の終焉』においては、「衆院唯一の小選挙区・奄美群島区の悲劇」という一項を設けて論じてはいるが、ここでは小選挙区制と中選挙区制の比較及び弊害などについての一般政治制度論であり、生々しい選挙実態等について踏み込んだ記述にはなっていない。保岡の政治のあゆみや実績などを著した『政治ひとすじ—青年政治家・保岡オキハルの10年の行動と考えをさぐる』においては、「1年生議員がいくらひとりでも吠えても限度がある。人のつながりが大きな成果を生む」「公共事業は大型産業のない島では大きな経済浮揚効果を作り出している」²などとの記述があり、これは、突然躍り込んできて島の政治情勢に大混乱を与え、公共事業を悪の温床呼ばわりしている徳田虎雄の言動を暗に否定した内容となっている。

数多ある保徳戦争関連の書物の中で、双方について相対的に客観描写している文献としては、保徳戦争勃発時の状況を描いたジャーナリスト加藤邦彦の著作『へき地の自民党殿—投票率90%を超えると何が起こるか—サア奄美』が挙げられる。この本では、読者の興味を引くように、選挙をめぐる人々の動きをやや誇張し、面白くおかしく書いてあり、保徳戦争を主題に

2 グループ新奄美（1983）『政治ひとすじ 青年政治家・保岡オキハルの10年の行動と考えをさぐる』グループ新奄美、26-27頁。

した唯一の文献といえる。

学術論文としては、柚正夫編著『日本の総選挙1983年－田中判決批判選挙の総合分析』に収められている論稿がある。現地取材も綿密に行い、政治学的見地から考察を行っている。だが、この本はタイトルにあるように3回の戦いのうち、1回目（1983年実施総選挙）だけを扱い、全体はカバーしていない。

以上のように、関連文献は数多くあるが、保徳戦争について学術的に体系的な検討が十分に なされているとは言い難い。とくに1980年代の保徳戦争が戦後奄美政治の流れのなかに位置づけられておらず、保徳戦争が始まるまでの保岡・徳田双方の動向についても十分なツメがなされていない。そのためにこれまでの保徳戦争に関する記述のほとんどがエピソードの寄せ集めの域を出ていないのである。

本稿では、保徳戦争に至るまでの奄美政治の動きを追い、最後に現職保岡の対抗馬として徳田が浮上してきた経緯を取り上げる。1983（昭和58）年12月両者間で最初に争われた総選挙以降の選挙戦そのものの論述は、次の機会に譲る。

本稿は3章立てで、第1章では「保徳戦争前夜」として、奄美が日本に復帰した直後の選挙から、対立の構図が形成され、その後それが崩れ保岡興治一強時代が築かれた頃までの動向を概観する。

第2章では、「対抗馬待望論の芽生え」と題して、いわゆる負け組であり、換言すれば反保岡勢力が頭をもたげ、「打倒保岡」を標榜して自派の代表を立てて、自派の既得権益を奪還すべく、候補者擁立に向けてのさまざまな模索策動を追う。

第3章の「徳田の登場」では、全国的に医療改革を進め軌道に乗せつつあった徳田虎雄が、医療事業を棒に振る危険性まで冒してどのような経緯で、自分のふるさと「奄美群島区」での出馬に至ったかを検証する。

第1章 保徳戦争前夜

第1節 保徳戦争突入までの奄美の政治情勢

戦後日本国憲法の下で衆議院議員選挙の一票を初めて奄美の人々が投じたのは、日本本土から遅れること8年、1954（昭和29）年2月15日であった。奄美はそれまでは沖縄と同様米軍の信託統治下にあったが、前年1953（昭和28）年12月、沖縄より一足先に日本復帰を果たし、この選挙は復帰直後に実施された「特別選挙」であった。当時の日本は定数が（概ね3から5人）の中選挙区制による衆議院議員総選挙が行われていた。その中で奄美群島は既述のように全国唯一定数1の小選挙区であり³、それは1993（平成5）年に鹿児島1区に合区されるまで続いていた。

この日本復帰後最初の「特別選挙」では、8人もの立候補者が乱立して⁴、その結果どの候補も法定得票が獲得できなかった。再選挙が実施され、戦後初の奄美選出第一号国会議員として

3 奄美群島地域が1953年12月25日に日本本土へ復帰した際、暫定措置として設置された選挙区であり、1992（平成4）年12月の公職選挙法改正で「当分の間鹿児島県第1区に属する」とされたことで消滅した。

4 立候補者は宗前清、泉芳朗、保岡武久、金井正夫、伊東隆治、西田当元、山本亀次郎、中村安太郎の8人であった。

自由党保岡武久⁵が選ばれた。

次の選挙からは国全体の総選挙と日程は歩調を揃えた。この選挙の当選者は前回次点の民主党伊東隆治⁶であった。すでにこの2回の選挙において、奄美群島の選挙も方向付けがなされたと言える。即ち、候補者の選定は中央、主として東京主導で進められ、有力候補になり得た人物も島出身というだけで永年本土に在住している中央の官僚OBやマスコミ人、労働組合のリーダーであった。前記「特別選挙」における8人の候補者の中で地元在住は泉芳朗と中村安太郎の2人だけであった。この中で代議士の椅子を勝ち取ったのは、保岡にせよ伊東にせよ官僚出身であった。また奄美群島は奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の5つの島⁷からなっているが、出身地は両者とも大票田名瀬市を抱える奄美大島であった。

その後も保岡・伊東両実力者間で激しい選挙が繰り返され、両人が交互に選出されるパターンが続いた。すなわち第28、29回の総選挙では保岡武久、第30、31回総選挙では伊東隆治が当選した。この間、保岡と伊東はそれぞれ3回ずつ当選したことになる。この有様を「外交畑と内務畑の両雄が抜きつ抜かれつの宿命の対決—激しいシーソーゲームを展開」⁸と右田昭進は自らの著書で書いている。だが、1968（昭和43）年3月28日に伊東が在任中に急逝したので、その後の補欠選挙で保岡が返り咲いた。保岡の在職期間はつかの間、直後に行われた1969（昭和44）年に実施された第32回総選挙で新人の豊栄光⁹に敗れ、長期に渡って争ってきた両雄の内、前年亡くなった伊東に次いで保岡も奄美群島の政治の表舞台からは姿を消して行った。

以上見て来たように、奄美群島区では保守2者による対立の基軸は復帰後間もなく出来上がり、その後厳然と存続してきていたのである。そこで事後談にはなるが、新たに始まった保徳戦争を見て、かつての伊東・保岡の戦いを想起する人が何人もいた。そして、この伊東・保岡時代はシーソーゲームの如く当選者が入れ替わってきたのだが、連続した当選回数（期数）がものを言う永田町の世界では、奄美群島区選出代議士は大臣ポストになかなかありつけなかった。そのことが響いて予算や事業も満足に取れないと、政治行政における指導層の人々の間では問題視され、この事態に終止符が打てればと願望していた。

第2節 保岡興治代議士の誕生から保岡一強時代へ

第33回総選挙（1972年実施）において現職豊栄光に対し、対抗馬として名乗りを上げたのが前回豊に敗れた保岡武久の長男興治であった。その保岡（以下、保岡興治を保岡と記す）は、33歳の若さながら見事初陣を飾った。次に行われた第34回総選挙では、先の選挙で落選し返り咲きを狙う元職の豊栄光が立候補し、一方社会党は党本部において地方政治部長の要職にあっ

5 保岡武久：1902-1983年、鹿児島県大島郡宇検村出身。東京帝国大学法学部卒業。内務省、一時兵役、警視庁、厚生省、鹿児島県副知事、衆議院議員（4期）、池田内閣で官房副長官。保岡興治の父。

6 伊東隆治：1898-1968年、鹿児島県大島郡龍郷町出身。東京帝国大学法学部卒業。外務省、通商局課長、中華民国大使館参事官、参議院議員（復帰前1期）、衆議院議員（3期）。

7 他に有人離島は加計呂麻島、請島、与路島などがあるが、ここでは市町村役場を有する島を挙げた。

8 右田昭進（2000）『奄美（しまんちゅ）の群像—島さばくり2—』交文社、81頁。ここで外交畑とは外務省出身の伊東隆治を、内務畑とは内務省出身の保岡武久を指す。

9 豊栄光：1917-2001年、鹿児島県名瀬市出身。東京帝国大学法学部卒業。農林省、大阪・熊本営林局長、衆議院議員選挙には無所属で出馬、当選後自民党入党。

た米倉文吉¹⁰を押し立てて保守二勢力の間隙を突く形で、戦いを挑んだが実らず、逆に保岡が票を大きく伸ばして再選される結果となった。以降第35、36回総選挙では、去就が注目された豊も立候補の構えは示していたが、出馬断念に追い込まれ、現職への対抗馬が共産党候補のみとなり票差も大幅に開き無風選挙と化していった。このように圧倒的な強さを有する代議士の誕生は、戦前戦後を通じて奄美群島政治史¹¹では初めてのことであった。この4期連続当選を経て、保岡は国土・大蔵と各政務次官を務め、「大蔵政務次官は大臣の早道コース」と自らが作成した冊子¹²にもうたった。更に要人¹³を選挙区に連れてきて、「大臣間違いなし」と語らせ大臣への就任が間近という空気を醸成していった。

ここで保岡の経歴について触れておこう。保岡の両親はともに奄美大島の出身者であったが、保岡自身は父親の仕事の関係で鹿児島市と東京都で育ち、島での生活経験はない。日比谷高校、中央大学と進み、司法試験に合格して裁判官、弁護士という経歴を積んでいった¹⁴。端正で、礼儀正しく非の打ち所がない存在。このような彼の毛並みの良さ、経歴から奄美のサラブレッドとも言われていた。その彼が、父親から受け継いだ強固な地盤を土台とし、中央においては、当時自民党の最大の実力者田中角栄が率いる最大派閥田中派に属して、選挙戦に挑んで来たのである。そして、選挙を重ねるごとに支持基盤を広げていった。

ここで改めて保岡は、なぜこれほどの一強体制を築くことができたのかを見ておきたい。

第一に、個人に着目すると、既述のように輝かしい学職歴、フレッシュさなどが郡民に受けた。当選直後は実にまめに選挙区に帰り、従来の奄美選出の政治家にはないフットワークのよさで選挙民との密な接触を図った。このように出来た背景には港湾の整備、船舶の大型化で多少の悪天候でも船便が利用出来、更には空の便の開設¹⁵で、父武久代議士時代までは東京往復4日かかっていたのが1日足らずで行き来できるようになるなど、以前に比べ交通事情が飛躍的に発展したことが挙げられる。各島々の域内においては道路網が隔々まで整備されて、併せて車台数も飛躍的に伸び、以前は泊まりがけでこなさなければならなかった地元での政治活動が日帰りのできるようになっていた。

第二に、組織的な面としては、自民党、その中でも所属派閥田中派の支援が挙げられる。まず保岡は次々と大臣など中央政界の大物を島に同行してきて政治力を誇示し、それが事大主義的傾向の強い島の人に受けた。1972（昭和47）年12月の初当選以来、主な来島閣僚を挙げると、まず1973（昭和48）年10月金丸信建設大臣、以下1974（昭和49）年9月亀岡高夫建設大臣、1975（昭和50）年8月小沢辰男環境庁長官、1976（昭和51）年8月田村元労働大臣、(いずれも)1979（昭和54）年8月橋本龍太郎厚生大臣及び二階堂進奄美振興委員長が挙げられる。圧巻は1981（昭和56）年9月15日の敬老の日、長寿世界一の泉重千代と徳之島に生まれた五つ子を訪

10 米倉文吉：1932-1987、鹿児島県伊仙町出身。早稲田大学政経学部卒業。日本社会党本部、東京奄美会幹事長。

11 戦前は県本土も含んだ選挙区で、1人区ではなかった。

12 グループ新奄美（1983）前掲書、182頁。

13 1982（昭和57）年8月、渡辺美智雄大蔵大臣が徳之島に来島したとき及び1983（昭和58）年12月、竹下登大蔵大臣が名瀬に来島したとき。

14 グループ新奄美（1983）、前掲書、182頁。

15 奄美空港供用開始は1964（昭和39）年、ジェット化は1991（平成3）年である。最小島与論島の1976（昭和51）年に供用開始をもって奄美全五島の航路開設成る。

ねるという名目で時の総理大臣鈴木善幸を徳之島に連れて来たことであった。前代未聞の出来事であった。

第三に、実績功績としては、奄美振興開発事業¹⁶を通して事業導入の大幅増大、農作物の価格引き上げなど、郡民所得の向上につながる政策を次々打ち出したことが挙げられる。これは、当時の国の政策、右肩上がりの経済動向とも密接な関わりがある。1972（昭和47）年に総理大臣に就任した田中角栄は、列島改造論を打ち出し、それまで都市部偏重であった我が国の予算分配の仕組みを地方重視の方向に組み替えてしまった。その一環で、従前国の直接的恩恵など受けることの少なかった徳之島にも総予算規模1000億円¹⁷を超える巨額の予算を投じ、負担割合も国費負担90%・地元負担10%という破格の国営農地開発事業が導入されたりした。

このように公共事業が増大してくると、元々強力な集票集金組織である後援会を保持してきた保岡陣営は、ますます選挙資金は潤沢になってきたとみなされた。以下はそのことに関連する新聞記事の引用である。「昨年夏、東京・赤坂の割烹に奄美群島のAクラスの土建業者16人が集められた。自民党幹事長二階堂進が、16人をにらみ『保岡を落とすようなことがあったら、奄振の面倒は見れん』との趣旨の発言をした」。このあと16人の業者のうち、15人が一千万円ずつ当座の選挙資金として、保岡陣営に渡した。保岡が徳田つぶしに十億円用意する一などのウワサが徳田サイドからばっと流れた¹⁸とあり、このことは保岡の豊富な資金力の一端を暗示するエピソードである。

1973年11月の奄美群島の基幹農作物さとうきびの価格交渉では、農家代表1300名余が、折からの大時化で船酔いに苦しみ、二晩三日を要する客船を借り切って上京。田中総理と直談判を行い、それまで1トン7000円だったのが、一挙に10000円の大台に乗せて、群島の砂糖キビ農家を狂喜¹⁹させたりした。もっとも、このことは前年1972年5月15日、日本復帰したばかりの隣県沖縄との共闘による成果であり、保岡だけの手柄とは言い難かったが、多くの郡民は、ただ一点保岡のみを見て、「保岡さんのおかげ」と受け止め、称えあった。

第2章 対抗馬待望論の芽生え

第1節 保岡一強体制を支える市町村長と、一強体制のほころび

国による地方への投資額の増大は、言うまでもなく公共事業の増大を意味し、それを具体的に担う土建業者と地元市町村の役割が飛躍的に伸びた。よって、首長選挙と国政選挙とは一段と深く密接な関わりを持つようになった。

総じて、都市部の自治体と地方の自治体では、地方の自治体のほうが強い権限を有しているように見える。都市部では経済力影響力とも地方自治体と比肩しうる企業、労組、宗教その他の団体、時として個人が存在していて、行政やそのまとめ役の首長の力は相対的にならざるをえない。比肩どころか、企業の力が強い自治体、例えば愛知県豊田市や茨城県日立市など企業城下町と呼ばれる地域も存在する。また、都市部では社会が成熟しているとも言うべきか、そ

16 奄美振興開発事業を通称「アマシン」という。奄美群島が日本に復帰した翌1954年から、復興や振興開発のため国が制定した高率の補助金制度。2008年まで2兆円以上が投入され、道路や港湾が整備された。

17 一例を記せば、当時の徳之島天城町の年間予算は40-50億円であった。

18 「布告なき戦い田中軍団 vs 徳洲会」『南日本新聞』、1983年2月12日。

19 福満壽雄（1983）『奄美さとうきび戦争』日本農業新聞、103頁。

の時々の時流に敏感に反応した世論形成がなされ、マスコミの多面的多角的普及発達などにより民度も高く、行政監視能力も高く、行政側もそれらに応じた、抑制の効いた相応の対応が求められ、現に実行に移されている。

一方、地方の自治体、それも離島僻地にあつては、都市部とはやや趣を異に、もしくは正反対に位置づけられる分野もある。奄美群島のようにこれと云って産業が育っていない各自自治体においては、域内の他団体が並列的ということではなく圧倒的に行政の力が強い。各自自治体内の民間の総生産所得より自治体の予算規模が大きく、土建業や商店、飲食店等も一番の得意先は市町村役場、最良の就職先も同様である。諸々の権限、富は市町村役場に集中していると言っても過言ではない。従つてその長を決める選挙も様相が違って来る。まず都市部では選挙は政党、組織、政策、諸々総合した中での論戦、闘争の集大成といえるが、辺地離島では公共事業を担う業者の関わりが突出しており、選挙事務所、運動要員、及び費用など丸抱えとも表すべき側面があり、正に土建政治と言われる悪弊を産んでいる。首長に誰がなるか、その奪い合いの色彩が強い形態にならざるを得ないのである。このことに関連し、落合尚彦が次のように書いている「日本の地方部では町や村の役場が最大の産業のひとつだ。だから真つ二つに分けた“血みどろ選挙”や“金まみれ選挙”という事態が発生する。この傾向は貧しい県ほど顕著だ。青森の“津軽選挙”や徳之島の“金まみれ選挙”は全国的に有名である」²⁰と。

それでは、当時の奄美の勢力分布はどうなっていたか、首長と大手業者の動向から観ておこう。まず首長については奄美群島市町村長会が「保岡推薦」の新聞広告²¹を出すまでは、14市町村長全員が推薦書に名前を連ねていた。土建業者においては、前述のように自民党幹事長二階堂進の求めに応じて東京赤坂に奄美トップの町田建設など大手16業者が集まって保岡への協力要請を求められたが、15業者だけが応じた²²。業者においては、早くもこの時点で1社が離脱し、そのうちに町長も一人が「態度表明できぬ町長 ハムレット」²³と書かれるような事態に陥り、後には徳田側に寝返った。表面上は静穏そのものながら水面下では、無風、無投票をよしとせず、何とか選挙に持ち込もうとする策動が既に始まっていたのである。冷や飯組の業者は、自派の代議士を出さないとパイの分け前にあずかれないと不満を口にし、更に保岡は独走体制を築いてからは「ほとんど島に寄りつかなくなった」²⁴など保岡が選挙区に帰って来なくなったことを地元軽視、島をなめているなどと噂しあっていた²⁵。

折から奄美群島は、「通産省の灯油価格調査 奄美が全国一高値」²⁶の記事が示すような離島物価苦、沖縄復帰に伴い「さいはて性」を失ったことにより、徳之島にあった郡内最大規模のホテルニューオータニの閉鎖²⁷、「繁栄の裏側で群抜く生活保護率」²⁸などで経済観光環境が悪化等

20 落合尚彦（1994）「政治の正体」『日本の正体』ザ・マサダ、199-200頁。

21 奄美群島市町村長会・同議長会連名で広告『南海日々新聞』『大島新聞』、1982年8月4日。

22 「布告なき戦い田中軍団 vs 徳洲会」『南日本新聞』、1983年2月12日。

23 「布告なき戦い田中軍団 vs 徳洲会」『南日本新聞』、1983年2月25日。

24 加藤邦彦（1985）「革命前夜」前掲本、51頁。

25 「選挙区に帰らなくなった」という批判の高まりに対して、当時の渡辺蔵相の口を介して「選挙区にばかり帰っているようでは、国会で活躍出来なくなるから、大きな仕事ができなくなる」と言わしめている。グループ新奄美（1983）、前掲書、43頁。

26 『大島新聞』、1983年10月1日。

27 『南海日々新聞』、1983年6月8日。

28 「本土復帰30年 奄美の光と影」『南日本新聞』、1983年10月20日。

の事態などもあり、元々の負け組に加え、従前の保岡支持者の中からも「そろそろこの際代議士を替えて、島々からウミを出し切ったらいいのだ。島が変わるのは今をおいていない」²⁹と対抗馬待望論が出始めていた。

次にいかなる対立軸があったのか、一部重なり、単純に割り切れない側面はあったが、それをここで見ておこう。その最たるものの一つは、「負け組」と「通称される」保岡に負けた元代議士の後援会及びその流れを汲む人々がまず挙げられる。次ぎに市町村の首長選挙で敗北した首長候補と、それを取り巻く業者である。しかしながら、奄美の首長選挙は、島毎に、そして市町村毎に形態が異なるので、ここで一刀両断には割り切れない。次に、本土では主要なポイントとなる政党の動向について簡単に触れておきたい。蔑ろにはできないが、圧倒的保守体質のこの選挙区では、候補者擁立において政党は絶対不可欠の要素にはなり難い。ここで押さえておきたいのは、当時の自民党内の派閥抗争、特に角福戦争³⁰は、少なからずこの保徳戦争に影響を与えていた点である。保岡がれっきとした田中派であったので、当然の成り行きで徳田は、田中派が対立する福田派と接近を図り、その支援を受けていた。

(1) 公共事業の配分

さまざまな対立の中で、この当時全郡に渡って最も大きな対立要因になったのは公共事業配分をめぐる争いであった。公共事業は本土・都市部でも政治と密接な関わりを持つが、地方、特に離島僻地ではその比重が圧倒的に高い。

奄美群島は、地場産業に乏しく、まともな働き口が極めて少ない。よって若者は学校を終えると90%は本土に出て行ってしまう実情にある。農業、商工業などどの分野も後継者不足という深刻な事態に陥っているが、公共事業を担う土建業のみは辛うじて埒外に置かれている。道路、港湾、住宅、農地、河川、山林等に関わる公共事業はいずれも島民生活にとって不可欠であるということは言うまでもない。

この公共事業の配分にもっとも影響力を持っているのが地元選出の国会議員であり、市町村では発注業者の指名権を有する市町村長であり、それをサポートするのが議員³¹である。1984（昭和59）年8月徳田虎雄に推されて新たに当選した高岡善吉徳之島町長はその就任記者会見で「選挙で私を支持してくれた業者は前町政のもとで2年半余りほされてきており、今後2年半はこうした業者を優遇する」³²とあからさまに語り、大なる物議を醸したが、これは自派の業者の声を代弁したものであり、島の選挙とその結果の実態を如実に表しているとも言える。

選挙で選ばれた首長は、本来は法手続きに則って公平公正な事業発注が求められるが、実情はそのようには運ばない。極論すれば、勝ち組は総取りであり、負け組は一つの事業の受注にもありつけないこともあり得る。

29 加藤（1985）前掲書、93頁。

30 田中角栄と福田赳夫による日本の政治の長期に亘った激しい政争・権力闘争を戦争に例えて呼んだもの。1970年頃から、竹下登が内閣総理大臣に就任する1987年（昭和62年）まで続いた。

31 制度上は、地方の首長と議員は役割分担が明確で、「サポート」という表現は適切ではないが、実態的には議員は首長の補助的役割に甘んじている場合が多い。議員に与えられている議員立法などの提案はほとんどないのが実情である。

32 『南日本新聞』、1959年8月18日。

一方、首長などを選ぶ側、すなわち住民側にも指摘されねばならないことがある。公共工事の中で箱物建設などメリットをもたらす事業が策定されると、本来考慮すべきは設置目的、地域バランス、利用住民の使い勝手、設置経費などであるが、それらは二の次にして「その事業は是非我が地域に、我が集落に造れ、はては我が土地に建設を」と地域エゴ、個人エゴむき出しの声をあげ、物品調達にあつては「我が店から、我が社の物品を購入しろ」とくることがある。それらに行政が唯々諾々と応じている場合がありうる。むろん場所や物品の選定には審議会等があり、入札基準は定められてはいるが、選挙のことを考えて、多少談合まがいの手段を用いてでも、法の網をくぐり抜けている事例がないではない。また前述のように、市町村役場はその域内では最良の就職口とも言えて、例えば全職員が100～200人規模の自治体であっても、長期在任の実力首長の場合などその子弟、甥姪など血のつながった肉親戚だけで10分の1近くも数えられる場合もありうる。更に辿ってゆくとその周りの有力後援会員の子弟縁者等もここに加わり、やや誇張した表現になるがトップと何らかのつながりがないと職員にはなれないのではないかと勘ぐりたくなるゆゆしき事態も招いている。

このようなことから島の首長選挙は激しさを増し、「首長選挙は業者にとって4年に一度の大がかりな営業活動である」と言いつつ憚らない業者もいる。候補者の公約や政治手法、経歴、人柄などが如何に重要かということが選挙演説などでは繰り返し力説されるも、勝敗の決定的要因にはなり得ない。悪質なデマ宣伝は一部に見られるが都市部で見られるムード選挙は少なく、「新風を巻き起こす」「風が吹く」などの浮動票頼みの現象はいくらあがいても巻き起こすことはできない。「どの候補を立てたらわが社、わが地域に有利か、そして私がより潤うか、我がボスに気にいられるか」という目の前の利益の行方が主たる関心事となる。

あたかも「公」ではなく「私」優先となっているような様相を呈するのである。憲法でうたわれている「全体の奉仕者」の規定理念など、あつてなきがごとしの様相を呈している。

(2) 奄美大島と他の島々との関係

奄美群島区選挙において、奄美大島と他の島々との関係について少し触れておく。これまで代議士は奄美大島出身のみが当選ということに対しての他島の不満がある。たとえば、上述した伊東の急逝に伴う補欠選挙で、当落の最大の決め手とも言うべき自民党の公認候補の切符を手中に収めたのは、前職の保岡武久ではなく、当時の政権派閥佐藤派の推した鹿児島県議の笠井純一であった。選挙本番では鹿児島県政界の当時の実力者であった二階堂進や山中貞則など県選出自民党国会議員全員が推し、赤沢正道自治大臣などがわざわざ東京から応援にかけつけてこ入れしたが、当選にこぎ着けるには至らなかった。

敗因としては、まずは両者の前職が国会議員と県議員との格の違いを挙げる人が多いものの、客観的には出身地盤の強弱が指摘されるであろう。笠井が群島内で最も人口の多い奄美大島ではなく、4番目の喜界島出身といった要因が当選を阻んだのではないかと見られた。当時の新聞にも「名瀬市³³の不人気 笠井氏に致命傷³⁴とある。

ちなみに戦後この奄美群島選挙区で当選してきた政治家の出身地（島）は、すべて奄美大島

33 名瀬市（現在の奄美市）は奄美大島の中心地であり、人口も圧倒的に多い。

34 『南海日日新聞』、1968年5月15日。

であった。奄美大島出身以外で立候補したのは、宗前清（沖永良部，自由党）、泉芳朗（徳之島，日本社会党）、西田当元（与論，無所属）、土岐直通（徳之島，日本社会党）、米倉文吉（徳之島，日本社会党）などがいたが、いずれも落選している。

離島出身者で当選したのは戦前1941（昭和16）年，宗前清（前述）が最後で，以来，結果として奄美大島出身者の独壇場になっていた。この傾向に、「離島から代議士を！」³⁵という声が高まっていた。徳之島では随所に広告塔が立てられ，他の島も含め対奄美大島意識が形成されつつあった。

(3) 保岡一強体制を許さないその他の要素

諸々挙げられようが，ここでは政治倫理と開発環境問題を取り上げておきたい。

少数ながら，政治倫理の観点から国政選挙を考える人々もいた。折から，ロッキード事件で田中角栄元首相が逮捕され（1976年7月27日），その法廷闘争で自分達の唯一の代表である保岡興治が，社会的に糾弾されるべき刑事被告人田中角栄の弁護活動を前面に立って得意然と行っているかのように写る姿を苦々しく感じる郡民も少なからず存在して，この観点からも「替えるべし」という空気もあった。「ロ事件裁判求刑の日にピタリと田中に寄りそって，テレビにその姿を映し出した保岡を田中そのものと重ねる形で批判していて，（徳田は）積極的に反角を口にした」³⁶とあるように，後に徳田も国政のこの動きに乗り繰り返し保岡攻撃の種にしていた。

奄美には手つかずの広大な自然が残っており，未開発地域の多い島々故に，巨大な石油基地，核廃棄物・産廃処理場など本土では迷惑施設の類いとみられるものについての構想が次々示され，一部では政治争点になっていた。これらはいずれも国策に沿ったプロジェクトで，政権与党の一員の保岡も先頭に立って推進してもおかしくはなかった。裏で手引きしているとの噂は立っていたが，保岡は，奄美を対象とした開発事業で，政治争点化した問題については曖昧な態度を取り，もしくは表だった動きはせず，そのためか国政選挙でも主要な争点にはならなかった。

第2節 候補者擁立の模索

(1) 在京在阪の出身者の状況

既述のように1979（昭和54）年，1980（昭和55）年と続いた2回の総選挙で，保岡興治の競争相手が共産党だけで，実質無風選挙の様相を呈しだした頃から，「課題山積のどん底にあえぐ地域なのに誰か出馬する人材はいないのか」の声は出していた。このことは地元でも話題に上っていたが，在京，在阪の有志の間でもしばしば取り沙汰された。奄美の場合も，国会議員は地元の意向だけではなく東京や大阪サイド³⁷の動きも重要な決め手になる。

35 「離党から代議士を！と云う声は，離島の国道昇格が自民党に揉み潰された時点で現地から噴出してきた。名瀬市での離島郷友会は狂気を帯び，このために東京から職を辞して，帰島する沖永良部の若者までいる」『道之島通信』，1982年8月15日，1頁。

36 『週刊サンケイ』，1983年12月22日，29頁。

37 ここでは東京は関東，大阪は関西一円を指す。

東京や大阪サイドというのは、広い意味では本土中央政界の動向も含めるが、狭い意味では在京在阪の奄美出身の有力者を指し、故郷に選挙時投票権はないが、文書作戦、選挙資金カンパ等を通じくちばしを入れてくる人々をさす。彼らの観点からいうと「自分の肉体は異郷（例えば東京や大阪）にあっても、心は常に奄美」といった状況にあるという。後に徳田虎雄も「愛郷無限」という言葉を頻繁に使うようになっていた。確かにここでいう出身者は郷土愛の持ち主で、郷里からは「成功者」「大物」「傑物」「大恩人」などともてはやされ、あがめられている。郷里で公民館建設とか学校新築改築、神社建立などに多額な資金を必要とする場合には、大口寄付を行って有りがたがられている。その人たちは、東京大阪を拠点に財をなし、名を売り、活動分野も広域かつ全国に展開し、故郷における選挙時には桁違いの資金源になったりすることもあるために、政治に関わる者にとっても侮れないものがある。

なお、こういう動きについて地元紙『南海日日新聞』の社説に「選挙と本土在住者」との見出しで、「本土在住諸先輩のふるさとを思う気持ちはありがたい。（中略）はっきり言って余計な口出しはしてもらいたくないというのが在郷者のいつわらざる気持ちだ」³⁸と、手厳しい主張が掲載されていた。

さて東京大阪サイドの動きに戻そう。これには自薦他薦数人が候補として取り沙汰されたが、ここでは著名人一人だけ挙げておく。

喜界町出身で後に日弁連会長を務めた弁護士山本忠義³⁹は、時はさかのぼるが1958（昭和43）年4月、緒方社会党鹿児島県本部長と川崎寛治⁴⁰衆議院議員から「保守的地盤の堅い（奄美群島）選挙区でも十分戦える候補者として」⁴¹立候補要請されるも、辞退した。その後の選挙でも、保徳戦争前まで毎回のようにながれが取りざたはされたが、具体化はしなかった。なお、山本は1987（昭和62）年に革新陣営から東京都知事候補に推されたこともある。

(2) 有力者大津鐵治・宮之原貞光の動向

対抗馬がなかなか決められない中で、より可能性が高いと見られたのが次の二人である。いずれも本人たちからそういう意図は明確に公にはされていないが、保岡への対抗馬候補となり得る、またはなつて欲しいと周りから期待願望が強かった人物である。一人は長年名瀬市の市長として君臨していた大津鐵治⁴²であり、もう一人は現職参議院議員宮之原貞光⁴³であった。

大津はそもそも1958（昭和33）年の総選挙では泉芳朗の推薦文⁴⁴を書き、伊東隆治急逝の際は南海日日新聞に「伊東先生の死を悼む」⁴⁵を投稿し、また豊栄光とは同じ名瀬市の出身で、七高、東大法学部政治学科の同窓でもあり、かつての旧友どうしだった。豊が1969（昭和44）年に保岡の実父武久を破り初当選したときに大津は友人の豊を支援している。従って当初は保岡武久・興治父子に距離をおいていた。このような流れ、経緯から、東京では東大卒の税理士

38 『南海日日新聞』、1985年5月28日。

39 山本忠義：1921-2002、喜界町出身。『沖縄の法的地位』などの著書あり、東京奄美会会長。

40 川崎寛治：1922-2005、旧鹿児島1区選出。

41 『南海日日新聞』、1968年4月18日。

42 大津鐵治：1914-1989、鹿児島県名瀬市出身。東京帝国大学法学部卒業。名瀬市長7期（1958-1986）。

43 宮之原貞光：1917-1983、龍郷町出身。日教組委員長から参議院議員。

44 『南海日日新聞』、1958年5月17日。

45 『南海日日新聞』、1968年4月5日。

で、元最高裁判事谷村唯一郎の後を継いで財団法人奄美奨学会の会長になった屋宮誠道⁴⁶が中心になって、対保岡で大津出馬への模索をしていた。この大津の国政転出問題については、元神戸商船大学学長平勇登⁴⁷の次の記述を引用しておく。

「豊（栄光）君が最初の国会選挙に出るとき、関西安陵会⁴⁸では意見が分かれていた。豊君を推す派と、安陵から誰かと言えば現地の第一線で苦勞し実を挙げている大津君ではないかという派があった。応援は有志ということにした。このことについて後日大津君と二人だけで話したことがある。『君は国会に出る意志はなかったのか』と『なかったと言えば嘘になる、然し重って⁴⁹まで出る考えはなかった。私が出ると言えば周囲が混乱し皆さんに迷惑をかけると思って断念した』⁵⁰と」。

次に、宮之原について触れよう。彼も周囲から推す声があった。具体的には「奄美社会運動史」⁵¹を書いた松田清の呼び掛けで「革新系から押し立てよう」と動き出し、同調者も関東・関西に少なからず存在した。当時、前述のように奄美にも保革対立とも言うべき争点が幾つかあった。例えば枝手久石油基地反対運動、韓国船阻止、核燃料再処理工場計画、徳之島以南幹線道の国道昇格推進などが挙げられる。これらの反対や推進運動などに対し、宮之原は自分の東京の事務所を活動拠点として提供し、会合や地元との連絡等では会員に自由に使わせ、献身的かつ先導的な役割を果たしていた。また宮之原は全国区選出でありながら、奄美群島民のみを対象とした『国会報告 わが奄美にもっと政治の光を』⁵²という112頁にも及ぶ冊子を作成した。ここには、上記の他、奄美群島新興開発特別法の問題からさとうきび、航路問題など、喫緊かつ切実な課題について島民サイドに立った取り組みが分かりやすく描かれ、これを手にした郷友メンバーは「宮之原も衆院転出を考えているのか」とか「宮之原先生こそ奄美代表にふさわしい、何とか押し立てよう」などと真剣に語り合うという動きが見られた。後に右田昭進は「奄美（しまんちゅ）の群像」⁵³で、宮之原のことを「“奄美党”に徹した革新の星」と表して、超党派で郷土問題解決に心血を注いでいたことに触れている。

しかしながら、現実問題としては当選を果たすには厳しかったといわざるをえない。その理由としてあげられるのは、奄美群島において革新陣営の推す政治家が育ち難い構造上の問題である。それは我が国の制度上地方財政の自治が確立されていないという制約からきている。この辺について政治学者高島通敏は概略「国は、地方を掌握し続けるために地方自治体に財政的確立を与えなかった。3割自治と言うけれど農山村地帯では地方税収入は3割（奄美は2割以下）に満たない。自前の財源がないから、そこで交付金や補助金という形でどうしても中央に依存せざるをえない」⁵⁴と述べている。これと連動して、群島民も中央政府政権与党に投票し

46 屋宮誠道：1923-1998、鹿児島県住用村出身。東京奄美会、関東安陵会、田畑健介練馬区長後援会他多くの団体役員。

47 平勇登：1910-1999、鹿児島県名瀬市出身。兵庫県人事委員。

48 安陵会は、鹿児島県立大島高等学校の同窓会組織。

49 原文のまま

50 人間大津鐵治出版編集委員会（1992）『人間大津鐵治』広報社、142頁。

51 松田清（1979）『奄美社会運動史』JCA 出版。

52 1974（昭和49）年9月発行数次にわたる国会報告やその模様を報じた新聞切り抜きをまとめたもの。

53 右田昭進（2000）前掲書、86頁。

54 高島通敏 1989『政治学のフィールド・ワーク』三一書房 71頁

なければならないというパターンにはまり、それが保岡・伊東の対立、保徳戦争時代を経て今日まで尾を引いてきているのである。

奄美群島区で具体的には、祖国復帰最大の功労者であった泉芳朗⁵⁵でさえ当選できなかった事例が挙げられる。泉の秘書を務めていた楠田豊春は「泉が、国、県の補助を否定していたわけではないが、群島民の多くが与党に身を置く国会議員の誕生を望んでいた」⁵⁶と述懐。この泉は2度落選の悲哀を味わったが、以来奄美群島における社会党候補は低迷し続けている。川上嘉⁵⁷、土岐直通⁵⁸と出馬はしたが、得票数7000票台に留まり、1972（昭和47）年末の衆院選（第33回、伊仙町、得票数11996票）における米倉文吉の擁立を最後に候補も立てられなくなっていた。

以上、大津は保守系でありながら政治的混乱を嫌い、宮之原は社会党系では当選の見込みが低いこともあって、土俵に上がる状況には至らず、奄美群島では保岡一強、選挙は無風状態が続いていたのである。

第3章 徳田の登場

第2章で見て来たように保岡と勝負出来そうな有力な候補者がなかなか見つからない中、とうとう目を付けられたのが、当時「医療界の風雲児」として全国的に脚光を浴びていた医師徳田虎雄であった。まずは徳田虎雄とはいかなる人物であるかをみておこう。

第1節 徳田虎雄の略歴と出馬の経緯

徳田は、1938（昭和13）年2月、徳之島⁵⁹に生まれた。両親は農業に従事していた。幼少から親の農作業の手伝いを行い、田畑で泥土にまみれ、サラブレットの保岡とは対照的な育ち方、どちらかという土着的な育ち方をした。実家はそれほど裕福ではなかったが、貧農⁶⁰とまでは言えなかった。小学校時代、実弟がまともな医療を受けられなかったことによる急病死をきっかけに医師を志したという。受験のため地元の鹿児島県立徳之島高等学校から大阪に単身移り住み大阪府立今宮高等学校へ転校し、2浪（実質3浪）して合格した大阪大学医学部を卒業後の1973（昭和48）年、最初に「徳田病院」を大阪府松原市に設置する。さらに1975（昭和50）年、将来的に複数の病院建設を目論んで、医療法人徳洲会を設立した。

「生命（いのち）だけは平等だ!」をスローガンに、「24時間救急患者を受け入れる」、「患者からの贈り物は一切受け取らない」など、それまでの医療界の常識を打ち破る特異な方針を打ち出してこれを実行に移し全国の医療機関に新風を吹き込んだ。だが、その試みは従来の医師

55 泉芳朗：1905-1959、鹿児島県伊仙町出身。鹿児島県第二師範学校卒業。詩人、教育者、日本復帰協議会会長。

56 『読売新聞』 奄美50年 2003年1月8日

57 川上嘉：1909-1994、鹿児島県大島郡龍郷町出身。税理士、東京奄美会会長、元参議院議員・全国区選出、第29回選挙出馬、得票数7303票。

58 土岐直通：鹿児島県大島郡天城町出身。鹿児島県労組委員長、第30回選挙出馬、得票数7581票。

59 徳田虎雄の出生地について、徳田の著「生命だけは平等だ」には「徳之島生まれ」とあり、「徳田秀子物語 “塩一升の女”」には「兵庫県高砂市に生まれる」とある。

60 徳田虎雄について書いた書物には「貧農、極貧の出」との表現が散見される。これについて徳田虎雄と同町同集落亀徳出身の秋武喜一郎（徳之島町教育長）は「当時高校進学率25%程度の時代に高校に入れて、しかも大阪に転校まで出来たのだから貧農とまでは言えない」と語った、2018年2月教育長室で筆者面談。

の悪しき慣行、一種の“うまみ”を打ち壊すものとみなされ、地域によっては建設予定地の医師会やその医師会とつながる地方自治体とたびたび摩擦衝突を繰り返す事態となっていた。

第2節 徳田虎雄の衆院選出馬の経緯

では、この徳田虎雄はどのような形で、奄美群島区から衆議院議員選挙に踏み切ることになったのだろうか。

徳田虎雄は、当時病院建設や医療講演のために全国を飛び回っていたが、たまたま徳洲会病院所属の医師が悪性腫瘍で若死にして、その経過を扱った本が「飛鳥よまだ見ぬ子へ」⁶¹という題名で出版され、同時に映画化されて話題となっていた。徳田虎雄はその製作費を5000万円出した上、その中の一人の登場人物として取り上げられていた。徳田はこの映画上映と出版記念会の名目で1981（昭和56）年5月12日に里帰りした⁶²。彼はその後、市町村毎に映画会を開き、しかも映画の収益金の一部と称して100万円ずつ各市町村社会福祉協議会に寄付した。この時点では徳田の出身地奄美での衆議院議員出馬の話題は全く出ていなかったもので、どの市町村でも超党派の歓迎ムードで彼を受け入れ、地元紙も同様に彼をきわめて好意的に取り上げていた。南海日日新聞は、1982年6月12日号では一面全面を割いて「『10周年』記念に無料『医療相談員』を配置」⁶³という大見出しで徳田虎雄特集を掲載するほどの熱の入れようであった。これに先立って5月20日、後には徳田の反対派の急先鋒となる大津名瀬市長が実行委員長となり、映画試写会とパーティが盛大に開かれた。会場となった奄美観光ホテル「ことぶき会館」は、創立以来、初めての800人以上の有志での大入りであった⁶⁴。

このような機会を通じ、徳田虎雄の活躍ぶり、熱っぽく話す演説の上手さ、金離れの良さが、奄美の人々の耳目を驚かし、徳田虎雄への関心が急速に高まってきた。そのことがいつしか選挙につながり、「この男だ、我々が待ち望んでいたのは！保岡と勝負出来るのは」というように話は、正に救世主到来の如く、思わぬ方向に進んで行ったかに見えた。そして、徳田に対し個人的に、または大勢の演説会場で「徳田先生、奄美から選挙に出てくれ」という言が飛び出すほどに急展開していった。

第3節 地元から仕掛けた人たち

徳田虎雄の出馬を具体的に地元から仕掛けたとされる人物が、複数存在する。ここでは客観的データが残っている二人の人物を挙げておく。その人物は徳之島と名瀬市⁶⁵に住んでいた。

まず徳田虎雄の地元徳之島の人物を挙げておこう。天城町議の前田英忠（1982年当時35）⁶⁶が週刊誌のインタビューに次のように語っている。「私は今年の2月、地元出身のボクサー竹

61 井村和清（1980）『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』祥伝社、同名の映画には竹下景子、名高達郎、ミヤコ蝶々らがキャストとなり、感動を呼んだ。

62 田中真人（1986）『徳洲会病院・徳田虎雄への疑問』エール出版社、155頁。

63 『南海日日新聞』、1982年6月12日。

64 同53。

65 名瀬市は2006（平成18）年笠利町・住用村と合併して奄美市になっているが、本稿においては保徳戦争時の呼称（名瀬市）を使う。

66 1947年生である。

下鉄美（Jフライ級・全日本7位）の名誉後援会長である徳田理事長に会って『（うわさされている）参議院じゃ困る、ぜひとも奄美のために衆院で出てほしい』と直訴したんです。すると理事長は『奄美の心はわかっている』といった顔で、頷いてくれたのでこれは…、と思いましたがね⁶⁷』といったやりとりがなされている。更に記事は、「これに呼応するように、徳田の動きは急に活発になり、舞台は、奄美群島の中心地名瀬に移ってゆく。」とある。

もう一人の人物は、名瀬市での地元有力者渡博文であった⁶⁸。渡は奄美ではいち早く宴会集会主体のホテル経営に乗り出し、奄美のホテル・パチンコ業界では押しも押されぬ存在であった。上記「映画制作と出版を祝う会」の会場提供、そのお膳立てなどで中心的な役割を果たしていた。

筆者は徳田から選挙の瀬踏み（下調べ）依頼を受けて、名瀬市で1982年5月渡に会った⁶⁹。保岡と同郷の宇検村出身でもある渡は、徳田が出馬に踏み切った場合、徳田陣営の戦略、組織拡大策の見通しについては「主戦場となる名瀬を含む奄美大島では、保岡父子と永年戦った元職の伊東隆治及び前職の豊栄光の地盤や後援会が数は減ったがまだ残っており、その陣営を取り込むようにすればよい。次に大きい票田の徳之島は徳田の出身地であり、喜界は前回保岡のおやじの武久を相手に自民党公認として戦った笠井純一県議の出身地であったが故に、五分五分の勝負はでき、沖永良部・与論は徳之島に近いから徳田優勢にもっていける。徳田個人に着目すれば、今や全国展開を図りつつある徳洲会病院組織の選挙参画を促し、新たな要素としては、この度各島々に多数設置される医療相談員⁷⁰が目玉で、これを組織化して徳洲会病院とタイアップしてフル回転させれば思わぬ成果が期待できる⁷¹』と力説した。

渡は、昨今の保岡の地元軽視と映る態度等に対する選挙民の不満、これと連動して「反」又は「非」保岡票が意外と多くなって来ている状況などから観て、徳田に十分勝機があるとの見通しを持っていた。

第4節 徳田の国政進出の別の意図

徳田虎雄の衆議院議員選挙出馬は、初期段階では上記のように地元の何人かの仕掛け人に促されて、請われてやむにやまれず出ざるを得なかったとの受身的形を表面上はとっているが、単にそれだけで片付けられるであろうか。徳田自身秘めたる意図や打算や戦略も伴って、選挙戦に突入して行ったと見ることもできる。

徳田はすでに「全国津々浦々に病院建設を行う」との目標を掲げて突進していたが、既述のように全国各地で医師会と、時には自治体と衝突を繰り返し、進出計画が行き詰まってもいた。その打開策の一環として、自らが国政に打って出て政治力をつけて障害をはねのけようという考えを持った。当初の狙いは参院全国区と定めて、影響力誇示の観点からトップ当選を目論んだ。この点について、徳田は週刊誌の取材に『『2年前にも噂がたった、打診は来ている』と

67 「ふるさと徳之島で反角運動 徳田虎雄が衆院を狙う」『週刊文春』、1982年8月26日、18頁。

68 「徳洲会流の選挙テクニック採点」『徳洲会・徳田虎雄への疑問』エール出版社、155頁。

69 寿日記（1970～1975）1982年5月29日。

70 名目上医療相談、病院建設を目的としていたが、実質は選挙運動要員。後にそのスタッフの詰所が医療相談所となり全郡に相当数設置され、運動の中心母体となる。

71 1982（昭和57）年5月29日名瀬市奄美観光ホテルで筆者面談。

認めるが最終判断には至ってなかった。各地の講演会では『オレが出たら40万票はとって見せる』と堂々豪語⁷²してもいる。こうしたことは公知の事実と言ってもよく、徳田を取り巻く医療界、友人、郷友会⁷³の者たちにも知れ渡っていた。

だが、参議院議員選挙への出馬を断念し、衆議院議員選挙に矛先を向けて来たということは、東京の活動拠点である徳洲会本部に頻繁に出入りする近しい者や同郷の者たちにも一様に意外・驚きとして受け止められた。その中には賛同する者もいたが反対する人物もいた。例えば、同郷の教育者で尊敬を集めていた龍野定一⁷⁴は「徳田を衆議院議員に出すというのは金を銅にするようなもので止めなければならない。今まで彼が医療界で孤軍奮闘し成し遂げてきたことがダメになる。悪いことをしないと政治家にはなれない。徳田君のような珍品を政治で台無しにしてはならない⁷⁵と異を唱えるのであった。

それまでは平穏そのもの和気藹々とやってきた、保岡・徳田両者を取り巻く郷友諸氏の間でも、さまざまな論議が取り交わされ、そこから浮上してきた打開策とも称すべきが、棲み分け論であった。即ち「政治は保岡、医療は徳田」もしくは「衆院は保岡、参院は徳田」というものだ。後に郡市町村会が広告でこのことをうたったために、保岡側のみの主張と受け取られているが、当初は後の徳田支持者、徳田信奉者の中にも同調者がかなり存在した。

しかしながら棲み分け論に徳田は関心を示さなかった。徳田は聞く耳を持たなかったと言ってもよい。徳田のように人一倍の執着心、劣等感の裏返しに闘争欲に燃えた人物は、いったん方向を決めてしまったら、あと戻りは出来ないという選択をせざるを得なかったであろう。なお、徳田の転進について「公職選挙法改正案が成立して比例制が導入され、参議院選挙において無所属で全国区への出馬が難しくなり、そこで徳田はターゲットを奄美群島区に絞って隠密裡に出馬準備を進めるに至った⁷⁶との指摘もある。このことも転進理由の一つではあったが、既に徳田の本心は奄美に向けられていた。

1982年5月末からチラホラ、徳田の衆院出馬の噂が始め、世間でも語られ始めてはきたが、まだマスコミ報道はされていなかった。8月に入ってから、8月5日の南日本新聞を皮切りに各紙が徳田の衆議選出馬を報じ始めた⁷⁷。

これらの記事を詳細に検討しても、徳田と頻繁に接触があったとしても、徳田がどの時点で、どのような意図で踏み切ったかについては見方が分かれていた。というのは、徳田側近の証言が一樣ではないからである。念のためここで、5月31日「徳田！衆議院選挙に出る」と初めて公の場で声が上がった徳之島の集まりについて、2人の最側近徳洲会幹部は次のような異なっ

72 「全国区立候補予定タレント30人」『週刊大衆』、1982年6月7日号、23頁。

73 一般的には「県人会」と呼称するが、奄美群島出身者は「郷友会」と使うことが多い。

74 龍野定一：1879-1986、鹿児島県大島郡徳之島町出身。福岡・鹿児島・広島・京都で教師として手腕を発揮、全国公民館協議会会長。著書『厳訓無処罰主義』他。

75 1982年7月4日鎌倉市紅葉谷の自宅で筆者面談。

76 田中真人（1986）前掲書、150頁。

77 ここでは流れを示すために時系列で記載：

「徳田氏の動き活発 雲行き妖しい奄美群島区」『南日本新聞』、1982年8月5日

「長寿の島も割る“徳洲会台風” 徳田虎雄氏が“角栄の弁護士” 宣戦」『夕刊フジ』、1982年8月14日。

「奄美群島に『徳田旋風』 大揺れの無風保守 現職陣営は防戦に躍起」『朝日新聞』、1982年8月23日。

「徳田虎雄徳洲会理事長が衆院を狙う。ふるさと徳之島で反『角』運動」『週刊文春』、1982年8月26日。

た対応をしている点を紹介しておこう。

まず、衆院選出馬は予め（出版祝賀会以前から）仕組まれてあったとする奄美責任者であった梅畑雅信秘書の証言。

「自分が予め根回ししていたサクラによる『トクダ！選挙に出ろ！』という声があがると、会場の人々がこれに呼応し熱気の渦巻きとなった」⁷⁸。

次に「なりゆきで衆院選出馬となった」とする2人目は秘書の能宗克行⁷⁹の証言だ。

「あの映画（飛鳥へそしてまだ見ぬ子へ）がヒットしなければ、徳田理事長の立候補はなかったのかも」⁸⁰と語っている。筆者は、2016（平成28）年11月16日東京新橋の第一ホテルで久しぶりに公判中の身の能宗に会った。能宗は、前言を繰り返した。

能宗のこの見方には、伏線がある。前述の「映画製作と出版記念会」について、各地区から要請もあって全郡的に開いて行ったが、保岡の妻の出身地和泊町（保岡の地盤）だけは会場を貸さなかった。作家山岡淳一郎は「すでに『もしかしたら徳田が衆議院議員選挙に出るのではないか』との噂が立ち始め、先手を打つ形で、会場を貸さなかったと見られていた。この辺について、保岡側にガツンと一発かまされ、『殴られたらなぐりかえさないといかん』として、その気になった。徳田は（衆議院議員選挙出馬を）決心した」⁸¹と書いて、偶発説を取っている。

徳田の衆院選への出馬は計算尽くの計画的になされたか、成り行きから偶発的になされたか、その真相又は徳田の真意を論断することはできない。だが、徳田の側近の証言が一様ではない」という点は明らかである。ともかく徳田自らが語ったように、1982年の5月の時点では、どうしたものかと迷いの中にあっただのが、名瀬の渡や徳之島の前田などを中心とした奄美地元からの強い勧めに心が動かされたという側面もないではなかったであろう。徳田も、「地元の人が困っているのを見て見ぬふりはできない」という言い方で、自分は地元から促されてやむにやまれず立ち上がったとの立場を繰り返し力説し、それが彼の行う選挙演説の定番であった。世界史上にあっても、誤算と過信の末に起きた偶発的に勃発した事件はあり得たのだから、徳田の決断もその範疇で捉えることもできなくはない。

他方、それだけではなく、徳田の病院建設及び運営管理上の経営戦略の一環として衆院選出馬が画策され、具体化していったということも強ち否定は出来ない。徳田にとっては、政治も事業展開の手段としての位置づけなのである。

第5節 徳田における情念と打算

ここで、徳田虎雄サイドに立って何故徳田が奄美群島区からの出馬であったのかについて、別の角度から付言しておきたい。

徳田には参議院議員の道もあったことは触れた。また衆議院議員選挙にあつての選挙区の選択も、当時の彼の知名度、人気⁸²の観点から言えば、他の選択肢をとっても成功の可能性は高

78 田中真人（1986）前掲書，157頁。

79 能宗克行：後の徳洲会騒動で話題になった人物。後に専務理事，金庫番。

80 徳洲新聞編集室（2011）『徳田虎雄外伝－日本の医療革命を目指す』主婦の友社，141頁。

81 山岡淳一郎（2017）『神になりたかった男 徳田虎雄：医療革命の軌跡を追う』平凡社，96頁。

82 「日本青年会議所公開－売れっ子講師177人」『週刊文春』，1983年7月21日，142頁。この中で「おもしろかった人の1位は徳洲会理事長徳田虎雄」との記事がある。

かった。親せきや奄美出身者が多く住んでいて、阪大の学生時代を過ごし、最初の病院を開設した大阪から出馬する余地もあった。その方が当選の確率が高いと見られていた。保徳戦争が始まった頃、徳田と親しかった人の中にも「せっかく保岡君が、現在良い形で奄美群島選出議員として頑張っているのだから奄美は彼に任せて、あなたは大阪でやりなさい。場合によっては、茅ヶ崎・大和と病院が既に出来ているこの神奈川でやってもいいよ」⁸³と強く進言する人も少なからず存在した。確かに徳田が名乗り出るまでは、保徳双方お互いに良好な関係を保っていた友人同士であったのだから、この棲み分け説は東京の郷友会でも説得力を持っていた。徳田はそれを押し返して、安易な道は取らず、火中の栗を拾うような拳に出た。故郷奄美を選挙区に選んでしまったことは想像をはるかに超えるような局面を迎えることは、最初から予想された。事後談になるが、あれほどその後の選挙で苦勞することもなかった。具体的には、3回の落選（保岡に2回、園田修光に1回敗れる）、度重なる主要スタッフの裏切り離反、身内から大勢の逮捕者を出すなどの出来事を指す。日本の医療改革、離島医療立遅れの是正では一定の功績はあったものの、それらを帳消しにするほどの数え切れない悪評にも身をさらすこととなった。

徳田虎雄の諸々の行動の出発点、即ち「離島（故郷徳之島）に病院をつくる」ためということもあったとすれば、やむを得ない選択だったのかもしれない。徳田は自著『真実を求めて生か死か!!：わが語録』の中で「徳洲会は都会に病院を作り、何とか成り立っている。しかしそれだけでは、ぼくの原点である農村、離島の医療を高めることは出来ない。やるためには、どうしても政治にかかわらないとだめだ」⁸⁴と書いている。

この点についてももう少し付け加える。医療施設の劣悪な徳之島では、都会から伝手で医者を誘致しても、長くはもたず短期間で島を引き上げてしまう先例⁸⁵がいくつかあった。人口減の歯止めのかからない島では経営が成り立たないとの理由だ。従って医療環境は代わり映えのしない状態のままで、中には「島では安心して暮らせない」と離村する人が相次ぐという悪循環が続いていた。徳田もこの辺のことは熟知⁸⁶していて、「最初から生まれ故郷に病院を造るのは僕もやれない。故郷に近代的な病院を造るには、先に造った都会の病院から専門の医師を派遣し、都会で上がった収益を振り分けることが税の運用面からも何とか成り立つ」と力説するのであった。

さらに、徳田虎雄の生き方としている「『やりたくない』と思うことを実行せよ。自分の本能の反対をやればいい仕事出来る」⁸⁷をそのまま実行に移したと思料される。徳田について

83 前掲。瀬田良市、瀬戸内町出身。東京・神奈川両奄美会長、湘南病院理事長、神奈川県政の黒幕と見なされ、徳田の関東進出（関東最初の病院は神奈川県茅ヶ崎）も地元医師会の猛烈な反対の中、陰ながら援助手引き。

84 徳田虎雄（1986）『真実を求めて生か死か!!：わが語録』海風社、215頁。

85 徳之島松原・福田医院、同母間・中村医院、同花徳・直島医院他。

86 「離島の命とくらし」『南海日日新聞』、1977年6月23日。この文中に、「一体、奄美の医療事情はいつになったら改善されるのか—郡民の間には、旧態依然とした離島の医療体制にいらだちと不安の声が高まっている。減らない無医地区、日の目を見ない休日・夜間診療所、県立大島病院の第一次急患業務廃止で危機に立つ急患医療体制…難題が山積するなか、へき地では幼い命、島を支えてきた老人、婦人の健康がむしばまれている。住民は医師と冷たい行政を非難し、医師や行政当局は医療制度をなじる。八方ふさがりの奄美の医療事情を打開する術はないのか」という記事内容がある。

87 徳田虎雄（1986）前掲書、165頁。

は「打算的、医療スーパーの経営者、売名行為、きちがい、きわもの、大ボラふき、扇動家、野蛮下品、目的のためには手段を選ばない男、法を守らない男」などと言ったレッテルを貼られ、一方では、正義漢・無類の郷土愛の持ち主、故郷に錦を飾った、医療改革者、とてつもない野望の持ち主、日本の病院王、世界の救世主等と諸々持ち上げられてきた。ある意味で人間の二元的側面を見事に地で行った男でもある。

このようにさまざまな顔を持った徳田だが、衆院出馬について十分説明仕切れないものもあり、また徳田自身においては迷いに迷って、苦渋の決断に至ったであろうということは、当時の彼の言動から類推して疑いの余地がない。

むすび

以上、奄美群島の二大勢力が内外の奄美同胞をも数多く巻き込み激しく争ってきた保徳戦争は「何故このような形で行われたのか」という課題について検証を行ってきた。本稿で明らかになった点をまとめておこう。

第一に、80年代の保徳戦争が起こった要因は、戦後奄美政治の推移の中で理解できる部分が少なからずあるという点である。それは、奄美では保徳戦争以前に、すでに長期に渡る対立の構図が存在していたという政治史である。即ち、保岡武久と伊東隆治と間で、13年近くシーソーゲームまがいの争いが続いたのである。このことにより、奄美に政治的不安定が生じ、それが響いて、長期的展望に立った開発計画の策定その実施の遅滞をもたらしていたが、保岡興治の登場、その保岡による一強時代の到来により遅れの是正が計られつつあった。当分この政治的安定状態は続くという見方をする人が大勢を占めていた。しかしながら、内実はすべての郡民を満足させてはいなかった。再び元来た道へと戻ろうとの機運が醸成されつつあったとき、偶々徳田虎雄という別次元の希代のヒーローが現れて、保岡一強を「良し」としないグループと合体して、奄美群島は新たな方向に向かうこととなった。

第二に、政治リアリズムの世界では根幹をなす組織力資金力において、両者はそれまでの候補者と比べ質量とも群を抜いていた点では共通していたが、個性、身の処し方、取り巻き、目指す方向等では相当の懸隔があり、際だって対極的でした。そのことが従前の選挙の枠をはみ出して、捉えがたい規模の大きい騒動まがいの国政選挙につながったと考えられる。奄美の政治史においても画期的な出来事であったといえよう。保岡興治の持つ属性、即ち都会育ち、常識の持ち主、品の良さ、エリート、エスタブリッシュメント、保守富裕層で、田中派のプリンス、世襲そして体制擁護派であった。政策的には、アマシンを通して地元奄美への巨額な国費導入に尽力した。

一方、徳田虎雄は土着的、野蛮、非常識、俗っぽさ丸出しでいながら、全国の医師会や自治体を相手に戦国武将さながら闘争心むき出しで闘う秩序破壊的であった。政治学者矢部貞治が、その著「政治学」の一節「政治に於ける人間」の1項で、現実の人間には、霊と肉、進歩と保守、知性と本能など二元的な相反する色々な性情が相克していると前置きし、それを比喩的に表した言葉として「パスカルが言うように、『天使にもあらず野獣にもあらずるもの』こそ、人間であり、ゲーテが謳う如く『天より最も美しき星を求め、地より最も大なる快樂を求

めんとする』⁸⁸と言う言葉を挙げているが、徳田虎雄の性情、行動様式、また彼に対する世のさまざまな評価を概観するとまさにこの一連の言葉が想起させられてくる。

医療改革者徳田は政治スローガンとして奄美地元においても公共事業より医療福祉が大事だとして、命の大切さ、差別からの脱却を訴えた。また、選挙区内に限定した、主に選挙時にしか露呈しない問題ではあったが、奄美大島という“親島”に対する徳之島他の小さな島々の対抗意識の存在等々、出馬当初の徳田虎雄はそうした反体制・反大島意識を刺激するにはうってつけの人物であった。

以上、保徳戦争、選挙そのものに突入する前段階について、保岡の対抗馬として徳田が登場するまでの経緯背景をみてきた。「保徳戦争がなぜ起こったか」という本稿の作業を前提として、実際の保徳戦争、すなわち保岡・徳田両者間で戦われた選挙戦そのものへの突入、選挙本番、結果に至る経過の詳述は、住民の意向反応などを織り交せて稿を改めて行うこととしたい。

参考文献

- 青木理 (2011) 『トラオ 徳田虎雄 不随の病院王』 小学館。
- 石井一二 (2009) 『徳洲会はいかにして日本最大の医療法人となったか』 アチーブメント出版。
- 泉芳朗 (1959) 『泉芳朗詩集』 第一印刷所。
- 出水沢藍子 (2011) 『徳田秀子物語 “塩一升の女”』 金尾好文堂
- 井村和清 (1980) 『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』 祥伝社。
- 「医療者と市民の会」取材班 (2001) 『徳洲会・徳田虎雄の野望と虚像』 ぱる出版。
- 加藤邦彦 (1985) 『へき地の自民党殿—投票率90%を超えると何が起こるか—サア奄美』 情報センター出版局。
- グループ新奄美 (1983) 『政治ひとすじ 青年政治家・保岡オキハルの10年の行動と考えをさぐる』 グループ新奄美。
- 平井一臣 (2004) 「復帰直後の衆院選挙にみる開発問題」『奄美ニューズレター』 鹿児島大学。
- 県議会議員中村安太郎 (1984) 『祖国への道—抗米8年奄美の復帰運動史』 文理閣。
- 県議会議員笠井純一 (1984) 『我が一期一会』 笠井純一後援会「絆笠会」。
- 小林紀興 (1979) 『徳洲会の挑戦』 祥伝社。
- 衆議院議員伊東隆治 (1968) 『白熊帝国を超えて』 今井印刷株式会社。
- 衆議院議員金井正夫 (1966) 「奄美大島復帰運動回顧録」 三元社。
- 柚正夫 (1985) 『日本の総選挙1983年—田中判決批判選挙の総合分析』 九州大学出版会。
- 高野孟・中里憲保・土田勝実 (1979) 「その秘密と構造」『合同出版』 合同出版。
- 田中真人 (1986) 『徳洲会徳田虎雄への疑問—医療革命英雄の内幕』 エール出版社。
- 徳田虎雄 (1982) 『わが医療革命』 サンケイ出版社。
- 徳田虎雄 (1985) 『ゼロからの出発』 講談社。
- 徳田虎雄 (1986) 『真実を求めて生か死か!!：わが語録』 海風社。
- 名瀬市選挙管理委員会 (1981) 『名瀬市・選挙35年史』 広報社。

88 矢部貞治 (1963) 『政治学』 勁草書房、96頁。

- 南海日日新聞社(1997)『南海日日新聞五十年史』新報出版。
- 人間大津鐵二出版編集委員会(1992)『人間 大津鐵二』人間大津鐵二出版編集委員会。
- ばばこういち(1979)『医療法人「徳田虎雄」の研究』ちはら書房。
- 福満壽雄(1983)『奄美さとうきび戦争』日本農業新聞。
- 右田昇進(2000)『奄美(しまんちゅ)の群像-島さばくり2-』交文社。
- 水野修(1993)『炎の航跡：奄美復帰の父・泉芳朗の半生』潮風出版社。
- 村山家國(1971)『奄美復帰史』南海日日新聞社。
- 保岡興治(2008)『政治主導の時代-統治構造改革に取り組んだ三〇年』中央公論新社。
- 保岡興治(1990)『思春期を迎えた日本の政治-金権選挙区・奄美群島に見る中選挙区制度の終焉』講談社。
- 保岡興治(1991)『政治改革と腐敗防止システム-小選挙区奄美群島区からの提言』講談社。
- 保岡武久先生寿像建立委員会(1981)『保岡武久先生寿像建立記念誌』。
- 山岡淳一郎(2017)『神になりたかった男 徳田虎雄：医療革命の軌跡を追う』平凡社。
- 矢部貞治(1963)「政治における人間」『政治学』勁草書房。

参考資料

『寿日記』1970-1980(昭和45-60)年(1972.5.24-7.31)